

# こもれびの森通信 8 月号

2014 月号

発行 宮城県こもれびの森 森林科学館  
〒987-2512 宮城県栗原市花山草木沢角間 10-7

TEL&FAX 0228-56-2330  
http://mifi.main.jp/komorebi.htm



## イベント報告 こもれびの森ウッドランドクラブ 自然観察と川遊び

7月27日(日)、天候が少し危ぶまれる中、総勢百余名参加の今期最大のイベント『自然観察と川遊び』が開催されました。100尾のイワナが草木川に放流され、子供たちが魚の手掴みに挑戦です。



ずぶぬれになりながらも、草木川は親子の楽しい歓声に包まれていました。魚のさばき方教室、塩焼き体験の外、恒例のソーメン流し、スイカ割等が行われ、盛り沢山の行事に森林科学館は多に賑わった一日となりました。(小山)



## 岩ヶ崎7区子供会来館

8月2日(土)、岩ヶ崎7区子供会31名の一行が科学館に来館しました。子どもたちはまず、科学館の前の草木川で水遊びです。水が冷たく最初はためらっていた子ども、慣れてくるに従い浮き輪で遊んだり、水生昆虫を捕まえたり、あっという間の1時間でした。

水遊びの後はソーメン流しを体験しました。はじめて体験した子がほとんどで、夢中でソーメンをほおばっていました。きゅうりやチョコ・ミニトマト等は取りづらく、苦労していたようです。

その後クラフト体験をし、最後にスイカ割りをして、楽しい一日を過ごし、子供達は夏休みの貴重な体験となったことと思います。(及川)



## こもれびの森のかわいいことりたち

こもれびの森サポーターで専属ことりカメラマン(?)の大友さんのコーナーです

今月は初めて撮影したものばかりです。豊かな森に感謝します。

クマ：7月号で“森の王者クマタカ”と書きましたが、「誰かお忘れでは…」とクマの親子が目の前に現れました。

距離25mです。朽木に群がる蟻や虫を夢中で食べているようです。私をしっかりとらんで、悠然と藪に消えました。クマも“森の王者”の風格を見せつけてくれました。



クマの親子

クロツグミ：4月以来追いかけていたクロツグミです。もう鳴くこともなくなり諦めていましたが、科学館のランダの向こうにピョンピョン跳ねる黒い鳥、ちょっと興奮気味でピンボケです。



クロツグミ

テン：249号線を横切る茶の体に尻尾の先の白い動物、イタチ? いいや大きい…10分ほど待つとまた現れました。ありがとうございます! 足と顔が黒い夏毛のテンです。多分オスかな?(大友)



テン

## ミツケ! こもれびの森 こもれびの森で見つけたよ

山のことなら何でもプロ級、サポーターの(は)さんのコーナー

7月中旬の炊事棟脇の広場は毛虫の運動場となる。毎年、カツラの木に蛹の家になる「スカシダワラ」を作ろうとクスサンが芝生の上を走り廻るのだ。

昭和の初期は、このクスサンから釣糸に使うテグスをとるため子供たちが競って捕ったといわれる。私もクルミの木に集まるクスサンを潰して糸を取り出した記憶が残っている。毛虫は結構な大きさと、薄グリーンの体に毛が長くて白いことより白髪太郎と呼ばれ、人により「カワイイ〜」「キモイ〜」に分かれる。

付近を見てみると忙しく動く黒い小さな毛虫がいる。これは白髪太郎(5、6零)になる前の3零くらいの幼虫だ。カツラの枝先には去年に作られた「スカシダワラ」があちこちに残っている。(は)



ちびっこ幼虫



昨年のスカシダワラ



この日は8匹が走りまわっていた

## まめちしぎコーナー 自家不和合性 ~ 「ゲンノショウコの場合」 ~

「雄しべ」の花粉が、同じ花の「雌しべ」に受粉しても正常な種子形成に至らない性質を「自家不和合性」といいます。自家受粉を防ぐ仕組みです。ゲンノショウコの花は、開いた直後は10本の「雄しべ」が目立ちますが、花が成熟すると「雄しべ」が脱落し、代わりに「雌しべ」が成長し始めて先端が5つに裂けます。同じ花どうしの自家受粉をこのようにして防ぎます。自家受粉を防ぐのは、さまざまな環境に適応できる強い遺伝子型を作ることと、近親交配を防ぎ遺伝子の交流をおこなって、集団が遺伝的に安定したものになるためと考えられています。被子植物の約半分は、自家不和合性であるといわれています。このような性質を持つ植物は、身近な花にもたくさん見られます。地球上で被子植物が繁栄した理由の一つに、この「自家不和合性」が関係していることは間違いなさそうです。(千葉)



く「ゲンノショウコ」：左の花は「雄しべ」が脱落して「雌しべ」のみに

## 雑記

今年も暑い暑い夏になりました。8月、原爆投下から69回目の原爆の日を迎え広島、長崎から世界中に平和のメッセージが届けられました。原爆投下の記憶と平和への誓いが世代を超えて語りつがれ、永遠に平和が続くことを願うものです。さて、3.11東日本大震災は発生から3年半が過ぎましたが、まだ復興の途に就いたばかりです。『天災は忘れた頃にやってくる』戦前の物理学者で随筆家の寺田寅彦博士の言葉とされています。博士は30年、50年も経つとさまざまなモニュメント、石碑そして人々の記憶も風化し、そのタイミングを計ったかのように必ず大震災が襲ってくるかと指摘しています。そして教育の場、家庭において記憶と行動を語り継いでいくことが、唯一風化を防ぎ命を守ると結んでいます。この暑い夏に行われる記念式典のように50年、100年と語り継ぎ記憶を繋いでいくことが残された者の責務と改めてかみしめています。(山本)